桑山河

第23号

平成22年5月15日
発　行
社団法人沼津牧水会

目　次

牧水評価小史
　—生誕125年の牧水　2
「特別企画展」
　—牧水の遺品遺墨等の展示　8
第56回沼津牧水祭
　短歌大会　14
　碑前祭・芝酒盛　15
第22回雛の歌会　16
文化講座　17
牧水記念館短歌会・短歌講座　18
牧水記念館俳句会　19
牧水記念館書道講座　20
サロン音楽の夕べ　21
余生を送る「千本太郎」　22
事業報告　23
定款・編集後記　24

牧水評価小史 ― 生誕百二十五年の牧水

伊藤　一彦

若山牧水は明治十八年（一八八五）の生れなので、今年は生誕百二十五年である。そして、牧水が第三歌集『別離』を出版して広く知られる歌人になったのは明治四十三年（一九一〇）であるから、『別離』百年という記念の年でもある。

『短歌研究』が一昨年「わが青春の一首」のアンケートを行い、その結果を発表している（平成二十年十二月号）。上位五首を記すと次のようになっている。

一位　白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

若山牧水『海の声』

二位　あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ

小野茂樹『羊雲離散』

三位　幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

若山牧水『海の声』

同　君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

北原白秋『桐の花』

五位　東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる

石川啄木『一握の砂』

上位五首の中に牧水は二首も入っている。投票した人のコメントが紹介されている。

「白鳥は」の歌については「戦後の流転の中で支えられた永遠の青春の歌」「青春の孤独と悲哀をあますことなく美しく吐露している」、「幾山河」の歌については「わが青春期に多くの挫折を経たから」「少女時代なんどとなく涙した歌」といったコメントだ。牧水の歌は読者のそれぞれの青春の思いと重ねられてきた。その点で愛誦歌ナンバーワンの歌人と言ってよい。

では、その牧水はどんな風に短歌の世界にデビューしたか。そして、歌人としての活動をどのように評価されてきたか。また、没後の評価と顕彰はどうであったか。簡単ながら評価の歴史をたどってみたい。

＊　＊

牧水が東京の文学雑誌に投稿を始めるのは県立延岡中学校三年の時、明治三十四年（一九〇一）である。明治三十年代は中学生の詩歌熱が強く、幾つもの投稿雑誌があった。投稿者同士はライバル意識をもって競い合った。牧水もそんな一人だった。

明治三十七年（一九〇四）に牧水は上京して早稲田大学高等予科文科に入学する。鹿児島出身で早稲田の同級生だった牧暁村は次のような思い出を記している。（『創作』昭和三年十二月号「若山牧水　追悼号」）

明治三十七年の何月ころであつたか、春の終りか、秋の初めでもあつたらうか、早稲田大学の正門のあたりは往くさ来るさの学生で混雑してゐた。

内から外へ出やうとして門に差蒐つた時、肩を並べて歩いてゐた学友の誰であつたか忘れてしまつたが、恰度外から内へとやつて来る一人の学生を目で私に知らせ乍ら、「君あれが若山牧水君だね」と教へてくれた。

これが私が牧水君を見た最初であつた。

牧水君は、その頃まだ我々と同じ投書家時代で左程有名でないのであつたが、出色の歌

才は一部分には認められてゐたのだらう。

少なくとも投稿家仲間には、牧水は「認められてゐた」存在だった。また、新潟県出身で後に良寛研究者として知られる相馬御風は、『創作』の同じ号で次のように記している。

私が牧水君と初めて相識つたのは、今から二十数年前、まだお互に早稲田の学生であつた当時でした。尤もそれよりずつと依前私が中学を卒業したばかりの頃、『秀才文壇』といふ投書雑誌に牧水君と私とが同じ号の巻頭に相並んで写真を出して貰つたことがありました。二人とも短歌の一等に入選したからでした。その若山繁が若山牧水であつたことは後で知つたことで、お互にそれを話し合つて共に大に笑つたこともありましたが、兎に角これも何かの縁ではないかとも話し合つたことでした。

『創作』若山牧水追悼号

投稿家仲間は良きライバルであり、その名前、作品、時には写真で顔までよく覚えていたのである。

そんな牧水がさらに広い世界で名を知られるようになったのは『新声』誌上である。明治二十九年（一八九六）に創刊されたこの文芸雑誌は多くの文学者を育てたが、牧水もその一人である。早稲田時代に多くの作品を発表している。特に四年生の明治四十年（一九〇七）には二百六十首を発表しており、その中には次のような歌があった。

けふもまたこゝろの鉦（かね）をうち鳴らしうち鳴らしつゝあくがれて行く　（八月号）

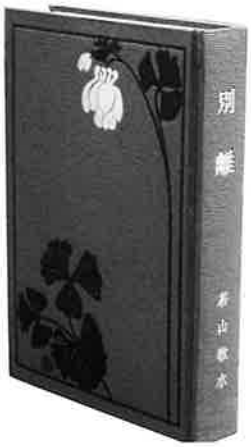
幾山河越え去り行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく　（八月号）

白鳥（はくてう）は哀しからずや海の青そらのあをにも染まずただよふ　（十二月号）

後にいくらか推敲されたが、原型はできあがっている。大悟法利雄は『若山牧水伝』の中で、「幾山河」「白鳥は」の歌は、「発表当時『新声』の読者によって盛んに愛誦された」と言い、「『新声』誌上における牧水はもう押しも押されもせぬ存在となって、ようやく一般文壇からの注目をも受け始めて来ていた。」と記している。

第一歌集『海の声』

第二歌集『独り歌へる』



第三歌集『別離』

そして、牧水が自信と期待を抱いて明治四十一年（一九〇八）七月に出版したのが第一歌集『海の声』である。出版の経緯等については牧水自身が後に回顧して書いた「『海の声』出版当時」に詳しい。

では、反響はどうであったかというと、牧水の当初の期待に反するものだった。もともと発行部数が少なかったことも影響していると言えよう。

翌々年の明治四十三年（一九一〇）一月に牧水は第二歌集『独り歌へる』を出版する。今度こそという決意だったが、版元が地方の小出版社で第一歌集より発行部数もさらに少なく、反響はほとんどなかった。

『独り歌へる』の三カ月後に出版した第三歌集『別離』によって牧水は世に出た。既刊の二冊の歌集に新作を加えた一千四首である。

なぜ、『別離』は前の歌集と違って牧水の出世歌集となったか。東雲堂書店というきちんとした出版社から刊行されたことや、同じ書店から自分が編集した『創作』を創刊して話題になっていたことなどが理由としてあげられる。ただ、ぜひ付け加えておきたいのは、『別離』の内容が工夫された編集と構成によって読者を引きつける歌集になっていたことである。（その『別離』の編集・構成については拙著『牧水の心を旅する』で論じたので、関心のある方はお読みください。）

明治四十三年五月刊行の『創作』第三号は、批評特集「『別離』を読む」を四ページにわたって行った。また、『アララギ』は六月号で「短歌研究」と題して十七ページを使い『別離』の六首を俎上にあげて合評形式で論じた。牧水は、同年に歌集『収穫』を出した前田夕暮とともに歌壇の中心的存在となった。二人は自然主義短歌のリーダーと見られたのである。だが、牧水・夕暮時代は短かった。その経緯を述べている太田水穂の次の文章が参考になる。

明星歌風の全盛期は明治三十五六年を中心として前後七八年に亘つて歌壇を切断した。それにくらべると、牧水ぶりの自然主義短歌の全盛期は明治四十三年から四十五年に至る三年内外を切断するに過ぎない。期間として極めて短かくはあるがそれにも係らず都鄙を通じて伝播の速かであつたことは、最近のラヂオあるひは映画のそれの如き形にも似てゐると云ふべきものであらう。しかも勢ひは刻々に動いて行つた。自然主義短歌の背後には、すでに十余年の潜勢力を養ひ来つた正岡子規系統の季題的写生歌が、この時は更に万葉調の名を被つて、めき〳〵と底深い力となつて動きつゝ押し寄せて来てゐた。

（『創作』前掲「若山牧水追悼号」）

このような歌壇的動きの他に、牧水が明治四十五年（一九一二）には故郷の父のために東京を去らねばならなかった事情も影響しているだろう。

牧水が夕暮とともに歌壇の旗手であった時間は短く、『アララギ』が中心の大正時代が到来する。だが、そんな時代にあっても牧水に対する支持と人気は歌壇内外に高かった。

大正六年（一九一七）に創刊された短歌総合誌『短歌雑誌』が翌年二月号で「歌人番付」を発表しており、その番付を見ると牧水は齋藤茂吉と並んで最上位である。

東の方	西の方
大関　齋藤　茂吉	若山　牧水
張出大関　島木　赤彦	太田　水穂
関脇　北原　白秋	前田　夕暮

『短歌雑誌』は大正十三年（一九二四）には、

『創作』第３号（明治43年５月刊）

読者に呼びかけて「歌壇十名家投票」を行っている。八月号の最終発表を見ると、牧水が第一位で、以下、窪田空穂、北原白秋と続いている。二年前から牧水は「東京日日新聞」「読売新聞」の選者も担当しており、文字通り代表歌人としての地位は確固としていた。

＊　＊

牧水は昭和三年（一九二八）九月十七日に沼津で世を去った。その年の十二月に刊行された『創作』の「若山牧水追悼号」は、短期間の編集ながら牧水理解のための充実した内容で当時の牧水評価を知る貴重な資料になっている。そして、翌年には『牧水全集』全十二巻が改造社から出版され始めた。

昭和十五年（一九四〇）の十三回忌の年には短歌総合誌の『日本短歌』と『短歌研究』のそれぞれ九月号が牧水特集を組んだ。前者の『日本短歌』は編集後記で「我々は巨人牧水に対する敬慕の念を新たにするものであります。」と記し、五十ページという大きな特集である。執筆陣も金子薫園、太田水穂、土岐善麿、北原白秋など十三名に及んでいる。後者の『短歌研究』は二十八ページの特集で、馬場恒吾、青野季吉、大悟法利雄、若山喜志子など五名が執筆している。没後も牧水は「敬慕の念」を抱かれていた。

『日本短歌』（昭和15年9月号）

『短歌研究』（昭和15年9月号）

また、この年の八月十七、十八日には沼津で創作社による「若山牧水十三回忌追善全国社友大会」が開かれた。

戦後の混乱がまだ続く中、昭和二十三年（一九四八）に沼津で、後の「牧水祭」の前身になる会が開かれた。その後、「牧水祭」をきちんとした形で催そうとしたが、機運がもうひとつ熟さなかったという。その前後の経緯は「沼津牧水会の足跡①」（沼津牧水会発行の会報『幾山河』第二号）に詳しい。そして、牧水を顕彰しようという人々の熱心な動きがついに昭和二十九年（一九五四）の第一回「牧水祭」となり、「沼津牧水会」の活動が以後年々充実していったことは、この資料や同会会報第三号～七号の「沼津牧水会の足跡②～⑥」に記されている。

一方、牧水の故郷の東郷村（現在の日向市東郷町）では坪谷の人々を中心に顕彰の動きがあったが、家業を継がなかった親不孝者との批判的な見方もあった。戦後の昭和二十二年（一九四七）に生家の裏山に地元有志によって歌碑が建立されたのをきっかけに牧水熱が高まっていき、昭和二十六年（一九五一）にはようやく「若山牧水顕彰会」が発足した。そして、同年の牧水命日の九月十七日に第一回の「牧水祭」が催された。

また、牧水が十代の八年間を過した第二の故郷ともいえる延岡市でも早くから地元有志によって顕彰活動がなされてきた。昭和十年（一九三五）に宮崎県初の牧水歌碑が牧水の愛した城山公園に建てられたのもその成果である。碑前祭を毎年行い、牧水生誕百年の昭和六十年（一九八五）には従前の活動を組織化した「牧水顕彰会」となり、さらに活発化した。

そして、沼津市、東郷町、延岡市の他の牧水ゆかりの多くの地でも熱心かつ積極的な顕彰活動が行われてきた。歌碑も次々に建立された。

牧水関連の出版物も戦後に多く出た。大悟法利雄著『若山牧水伝』の巻末に詳しく出ているが、特筆すべきは昭和三十三年（一九五八）から刊行の始まった『若山牧水全集』全十三巻（雄鶏社）であろう。若山喜志子・大悟法利雄の編集・校訂である。

昭和四十年代に入り、牧水の評価と顕彰の活動がより顕著になってくる。

主なものを年表で記してみる。

昭和四十二年（一九六七）　東郷町に牧水記念館開館

昭和四十三年（一九六八）　大悟法利雄編『牧水写真帖』（新声社）出版

昭和四十四年（一九六九）　森脇一夫著『若山牧水研究―別離校異編』『同―別離研究編』（桜楓社）出版

昭和四十九年（一九七四）　大岡信著『今日も旅ゆく・若山牧水紀行』（平凡社）出版

昭和五十年（一九七五）　大悟法利雄編『若山牧水全歌集』（短歌新聞社）出版

昭和五十一年（一九七六）　大悟法利雄著『若山牧水伝』（短歌新聞社）出版

昭和五十三年（一九七八）　大悟法利雄著『若山牧水新研究』（短歌新聞社）、『創作』臨時増刊「牧水没後五十年」特集号―塚本邦雄・玉城徹他執筆

昭和五十六年（一九八一）　『若山喜志子全歌集』（短歌新聞社）、藤岡武雄著『若山牧水』（桜楓社）出版

昭和六十年（一九八五）　大悟法利雄著『歌人牧水』（桜楓社）出版

昭和六十一年（一九八六）　『創作』一月号「牧水生誕一〇〇年記念号」山本健吉・中野菊夫他執筆

『創作』臨時増刊
「牧水没後五十年」特集号

『創作』牧水生誕 100 年記念号

昭和六十二年（一九八七）　沼津市若山牧水記念館開館

（詳細は『創作』の「牧水生誕一〇〇年記念号」に出ているので、そちらを参照していただきたい。）

昭和の終りまでを記してみた。私は昭和四十年代の終りから五十年代にかけての出版物が今日の牧水評価の土台を作ったのではないかと思う。牧水の新鮮で現代的な魅力をもつ大岡信著『今日も旅ゆく・若山牧水紀行』、牧水理解の基礎文献を提供する大悟法利雄編・著の二冊の本が大きな役割を果たした。

この時期に牧水が関心を持たれ始めた理由は社会背景もある。昭和四十八年（一九七三）はいわゆる石油ショックの年だった。海外の石油に依存したモノ中心の生活の脆さが露呈した。一方、この年は小松左京著『日本沈没』がベストセラーとなり、映画にもなった。公害の深刻化や狂乱物価の中で人々の不安が高まった。高度経済成長時代のモノとカネを最重要視する生活は真に幸福に値するものかどうかの問いが起らざるを得なかったのである。そして、自然をかくも破壊してよいものかどうかの反省をせざるを得なかった。そういう時に牧水の豊かな自然観と人生観に注目が集まり始めたのではなかったかと考える。アメリカ的な物質主義や西欧流の「個人主義」でない価値観の模索を人々は始めたのである。

平成に入っての牧水評価の動きはここでは省略するが、より盛んになってきていることは間違いない。ただ、牧水の八七〇〇首の作品が真に読まれているかということになると、まだまだであるように思える。旅と酒を愛した牧水のイメージばかりが先行して、その文学と人生の本質に十分に迫り得ていない現状を感じる。まずは虚心に一首一首を読むことから始めたい。生誕百二十五年の今年が牧水評価の新しい出発の年になることを願う。

四年前に発足した宮崎の「牧水研究会」は、今年は六月六日（日）に京都で、十一月六日（土）には東京で講演とシンポジウムを行う企画を立て、準備が進んでいる。ご関心のある方はぜひおいでいただきたい。

◇牧水研究会「京都シンポジウム」
日　時　六月六日（日）午後一時～五時
会　場　ハートピア京都（京都市営地下鉄「丸太町駅」下車すぐ）
参加費　二千円（事前申込み不要）
講　演　上田　博　立命館大学名誉教授
鼎　談　川野里子、吉川宏志、伊藤一彦

◇牧水研究会「東京シンポジウム」
日　時　十一月六日（土）午後一時～五時
会　場　青山アイビーホール（予定）
講　演　赤坂憲雄　東北芸術工科大学教授
（他の詳細は未定）

問合せ先＝牧水研究会
長峰　〇九八五-二二-〇〇一六
又は　伊藤　〇九八五-二八-〇四六一

『牧水研究』

プロフィール　（いとう　かずひこ）

一九四三年宮崎市生れ。早稲田大学在学中に作歌を始める。六八年「心の花」入会、現在「心の花」選者。八七年評論『若き牧水』で宮崎県文化賞、九六年第六歌集『海号の歌』で第四七回読売文学賞、〇八年第一〇歌集『微笑の空』で第四二回迢空賞、一〇年第一一歌集『月の夜声』で第二一回齋藤茂吉文学賞受賞。ほかに歌集に『伊藤一彦歌集』『続・伊藤一彦歌集』、評論に『牧水の心を旅する』『あくがれゆく牧水』『命の砕片―牧水かるた百首選』、編著に『若山牧水歌集』など。現在、「毎日歌壇」「産経歌壇」「宮日歌壇」「西日本歌壇」「熊日歌壇」「淡交歌壇」等の選者。読売文学賞、若山牧水賞などの選考委員。現代歌人協会会員。宮崎県立看護大学客員教授。

歌人牧水の遺墨、遺品、書籍を中心とした

特別企画展

村上教育次長、榎本館長、林理事長
によるテープカット

沼津市若山牧水記念館は、開館以来二十二年を経過したが、これまでに本会が収集し、寄贈または寄託を受けた牧水関係資料を一堂に展示することはなかった。そこで、本会が所蔵する半切、色紙、短冊のすべてを展示し、あらためて牧水の遺墨を観賞するとともに、歌集をはじめとした著作物や自筆原稿、書簡などの貴重な資料により牧水の業績をしのぶ特別企画展を開催することになった。

十一月十七日（火）の「特別企画展」開会式は、村上益男沼津市教育次長、榎本篁子館長ほか各方面からのご列席と本会役員や会員の出席のもと、賑やかに行われた。

「特別企画展」を取材した各新聞社が記事を大きく取り上げてくれ、反響を呼んだ。

十二月二十日（日）の閉会までの三〇日間の会期中に一、二五八人の方々に観覧いただくことができた。

＊

展示室入口正面には高橋希人氏から寄贈された「幾山河」の大切な軸を、入口右側の壁には牧水が当地で詠んだ歌の半切六幅を掛けた。主会場のラウンジには四季折々の歌の半切十六幅を掛け、それぞれ短い解説文を付して観賞の手引とした。計二十三幅もの半切が掲げられた様子は、さすがに壮観であった。

これらは、本会が所蔵する半切に加え、市内在住の本会会員が所有されておられる大切な半切をお借りして展示することで、充実した内容とすることができた。

四季折々に詠まれた歌１６首の半切の軸が掛けられた壮観な展示風景

牧水が当地で詠んだ歌６首の半切の掛軸

展示室入口の「幾山河」と当地で詠んだ歌の半切

特別企画展に寄せて

沼津市若山牧水記念館館長　榎本篁子

君を慕ひ君を尊ぶ沼津びとの眞心凝りしこの記念館　　大悟法利雄（初代館長）

牧水を惹きつけてやまなかった沼津の千本松原。

その松の枝越しに富士を仰ぐ若山牧水記念館が昭和六十二年（一九八七）十一月に開館して今年で二十二年を迎えました。

オープンまでの五年にわたる沼津牧水会はじめ皆様の御苦労は忘れることができません。その賜が連綿と今に続いて二十二年となったのでございます。その後も牧水関係の資料は御寄贈や寄託等、関係者の御努力によって益々充実してまいりました。

この度、常設展示の限られたスペースでは叶えられなかった折角の収蔵品を皆様に御覧いただきたく、特別企画展を開催いたしました。

数々の収蔵品ひとつひとつに牧水のエピソードがあり、御寄贈いただいた方との経緯など、そのままにするには惜しいものが多々ございます。その背景を知ることも皆様に牧水を知っていただき、より深めていただく上に見落とせないことと存じます。

すでに成されているもの、更に加えてゆくものを把握することもこの企画展の目的の一つでございます。

今回は牧水の旅をテーマとし、定評のある紀行文を資料と共に展示いたしました。また沼津に癒された「牧水の沼津」の歌にも重点をおきました。

なお、ノーベル賞受賞前に揮毫された川端康成氏の「牧水記念館」の書はしばらくぶりの御披露です。この書は、大悟法利雄氏が東郷町の牧水記念館のために川端康成氏に揮毫を依頼したもので、大変貴重なものであり、この度の特別企画展の記念すべき展示でございます。

牧水とは初対面の方も、別れる時は牧水から温かく包まれるような印象を受けたと聞いております。

この度の展示がそのようでありましたら有難く、皆様の御参集を心よりお待ち申し上げております。

１６首の歌の半切を四季ごとに懸け、解説を添えて展示

若山家から寄託を受けた「恋　いざゆかむゆきてまだ見ぬ山をみむこのさびしさに君はたふるや」「つきつめて何が悲しといふならず身のめぐりみなわれにふるゝな」「よる歳のとしごとにねがふわがねがひ心おちゐてしづかなれかし」の貴重な三幅の半切は、展示室内に展示した。

また、復元書斎の床の間に拝借した「てつびんのふちにまくらしねむたげにとくりかたむくいざわれもねむ」を懸け、拝借した「しら玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」「疲れはて眠りかねつゝ夜半に飲むこのウヰスキイは鼻をやくなり」と、本会が寄託を受けた「いざいざと友にさかづきすゝめつゝ泣かまほしかり醉はむぞ今夜」の三幅の半切を、本会所蔵の「酒の歌」数幅と合わせて展示したことで、堂々とした展示風景となった。

色紙や短冊は、歌を所収した歌集に添えて展示したり、「牧水の旅と歌集」のテーマで構成したなかで、色紙や短冊の歌と牧水の旅とを関連付けるように展示した。

歌集は、奥付から発行年月日、定価、発行所が分かるようにし、歌集を出した当時の牧水の思いが伝わるように、序文からの抜粋や簡単な解説を付して掲示した。歌集を出した当時の牧水の肖像写真や牧水と交流のあった人々とのつながりが分かる写真を添えて展示することにより、牧水の人と作品への理解を深めていただけるようにした。

堂々とした展示となった酒の歌の半切

「紀行文の名手」として高く評価される牧水の紀行文と旅との関連について見て取れるように、大悟法利雄氏作成の牧水略年譜を参考に、写真と表を用いて牧水の業績を時系列的に表で示した。紀行文の題名だけでは知り得ない「牧水の旅と作品」との関連性を浮かび上がらせることができ、作品の理解にもつな

「牧水の旅と作品」をテーマにした展示

「牧水の旅と歌集」をテーマにした展示

「牧水の旅と作品」を関連づけた年表と写真、色紙、短冊などで構成した展示

がると考えた。また、表に添えた写真や色紙、短冊からも歌の詠まれた時期や場所をうかがい知ることができる展示構成とした。

牧水の旅について紹介するため、「みなかみ紀行」の旅の足跡を示した地図を掲示し、そばに牧水の旅姿の立像を置いた。旅姿の牧水の写真に牧水が旅の間中、陸地測量部の五万分の一の地図とコンパス（磁石）を携行して道を間違えないようにしていたこと、腰には合財袋を提げ、薄くて携帯に便利な列車時刻表、ノート、筆記用具等を収納し、小さな足に合う九文半の草鞋を見つけたときには、何足かまとめて買い、予備に腰にぶら下げ、杖代わりをする洋傘を手に野山を歩いたことなどを解説した。

揮毫旅行については、その契機となったいわゆる「市道の家」の本会所蔵の青写真と配置図を掲示した。

展示室の上棟式の写真には牧水が詠んだ「むねあげの祝ひのもちをわがまくや千本松原の松の数ほど」の即興の歌が紹介されているが、企画展開催に合わせたかのように珍しい短冊が見つかった。蘭契社写真部の名が刷られた厚紙で作った即席の短冊で、社友・服部純雄氏が上棟式に連れて来た八十余歳になる氏の祖母の長寿にあやかり、新築の家が末永くあれと願って詠んだ「わが家上棟式の日、服部のおばァ様を招きまつりて」の詞書がある

家をわがけふ打ち建てつ今は早や君がよはひにあやかれとこそ

の即興の歌が認められている。

戦災で焼失したと思われていた牧水の「市道の家」の土地登記簿が静岡地方法務局沼津支局に保存されていることが分かったため、土地登記簿の謄本を取り寄せ展示した。登記簿謄本には、所有権者を表す甲区欄に牧水の本名である若山繁の名が記されており、抵当権などの権利を表す乙区欄には、二度にわたり市内の上土にあった御厨銀行（創作社友で後に沼津市長となった長倉宜一氏が銀行員として勤めていた）から融資を受けたことが記されている。

銀行からの融資を返済するために計画的に始められた揮毫会は、「市道の家」建築の前後から各地で行われていたが、本格的な揮毫旅行について、大正十四年の大阪市、岡山市、山口県などを経てほぼ九州を一周する揮毫会開催の旅、ほとんど知りあいもないまま出かけた大正十五年の北海道揮毫旅行、翌昭和二年の朝鮮旅行など、地図や行程表を作成して掲示するとともに、揮毫会の準備から開催まで尽力した社友たちと写った各地での記念写真を展示した。

揮毫旅行先から沼津の家族や留守居役の大悟法利雄氏に宛てた書簡や観光絵葉書などをあわせて展示した。本会に寄贈された多数の絵葉書のなかには、牧水独特のユーモアにあふれたものがあったりして、読んでいて楽しくなるものが残されている。

葉書には、家族宛の大学時代のもの、旅先から喜志子夫人や長男旅人氏に宛てたもの、親しくしていた延岡中学時代の親友鈴木財蔵氏や各地の社友に宛てたものなど多数あるが、今回は「旅と作品」のテーマに絞り展示した。

書簡も多く残されている。母マキから喜志子夫人に長男旅人氏の誕生祝いの品を送るにつけて、現金を自分に持たせると何に化けるか分からないので、どんなものでもいいから現物で送ってもらうようにしたから、祝いの品が届いたなら母親が読めるように平仮名で書いた礼状を認めてやってほしいと、日向の坪谷村から信州の喜志子夫人宛てに出したもの。西浦古宇で関東大震災に遭遇し、慌てて沼津へ帰り被災状況を古宇の社友・高島友次郎氏に宛てて伝えたもの。新居の構想を延岡中学同級生の設計士村井武氏に宛てて綴ったものなどをテーマと関連づけて展示した。

葉書のなかには、九月に亡くなった牧水が夏ごろから宛名だけ書いて準備していた年賀状など、珍しい資料が榎本篁子館長からもたらされ、展示に加えた。

書籍と原稿については、牧水没後、大悟法利雄氏と喜志子夫人が編集した改造社版『牧水全集』十二巻（昭和四～五年刊）、没後三十年を記念し雄鶏社が出した『若山牧水全集』十三巻（昭和三三～三四年刊）、その復刻版で日本図書センターが昭和五七年に出した『若山牧水全集』、平成四～五年に増進会出版社が出した『若山牧水全集』全十三巻・補巻一巻等を復元書斎の違棚に、大悟法利雄編著『若山牧水伝』『牧水新研究』『牧水写真帖』『若山牧水全歌集』を書斎の机上に展示した。

また、直筆の歌稿、牧水による校正の跡が残る新聞のゲラ刷りや随筆の原稿を展示したが、発行間際まで牧水が懸命に推敲した様子がしのばれた。

このほか、川端康成氏が東郷町の牧水記念館の表札にと、大悟法利雄氏に乞われて揮毫した三枚の半切のうちの一枚が表装され、大悟法氏から本会に寄贈されていたが、この貴重な揮毫をこの機会に展示した。

企画展開催中の十一月二十八日（土）には、「あるご」主宰の歌人で、前日本大学教授の藤岡武雄先生を講師にお迎えし、「牧水短歌の問題点」の演題で記念講演会を開催した。

特別企画展の開催にあたり、次の方々にご協力いただいた。深く感謝申し上げる。

若山家・榎本篁子当館館長（半切・色紙・短冊・原稿・歌集等書籍・書簡ほか）、綾部惠市様（半切）、工藤惠子様（半切）、坂倉幾夫様（登記関係）、清水敦子様（半切・短冊）、田中和男様（半切・短冊）、牧水荘土肥館様（写真）、前田千枝子様（半切）、森田緑様（半切）、山口貞造様（半切・扇面）、山本三朗様（半切）、渡辺酒造㈱様（展示台）並びに沼津市明治史料館（所蔵資料＝大正時代の列車時刻表）

第56回沼津牧水祭 短歌大会

十月十四日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール

講演をする坂井修一先生

本年度の「沼津牧水祭・短歌大会」は、講師に短歌結社「かりん」編集委員の坂井修一先生を招聘した。歌集『アメリカ』で第十一回若山牧水賞を受賞された坂井先生は、二十歳代の作品をまとめた第一歌集で寺山修司賞を受賞されるなど輝かしい経歴を持つ工学博士で、現在東京大学大学院教授。

須永秀生本会副理事長の司会、曽根耕一本会監事の講師紹介で開会となった。

「牧水と現代」と題する午前中の講演では、牧水の抒情の本質に迫る「さびしさ」について、代表歌を引いて牧水の奥深い心理を解説。つづいて、現代の「うざったさ」という意表を衝いた話題に移る。佐世保の少女殺傷事件、同級生が加害者となってしまった悲劇に震撼とした記憶が甦る。インターネット上に書き込みされた少女の詩が紹介された。叫びにも似た猥雑なことばが連なり、少女たちの「うざったい」内側を告発するかのような一編の詩に加害少女の心の「さびしさ」が表れているのでは、と坂井先生の感性は読み解かれる。カッターナイフ一本で人の命が失われる現代社会の歪みを問題提起された。

午後の歌会では、一六四首の応募作品の内、出席者全員の詠草を懇切に講評。具体的な指摘に会場の皆さんも頷かれ有意義な助言をいただくことができた。

講師選の牧水賞と互選賞上位作品

牧水賞一席　宇部市　藤井重行

モヂリアニの首長女に見られつつ今日のわが家に施錠をなせり

牧水賞二席　島田市　西川幸子

声に出し幼と数ふ夕やみにオクラの花のひいふうみいよ

牧水賞三席　裾野市　石井すみ子

足引きの病に堪えて魂きわる今日の命を明日にか繋げん

「互選賞」

市長賞　沼津市　山田純子

指先にトマトの香りを移しつつ朝の畑にわき芽摘みおり

市議会議長賞　御殿場市　稲葉歌子

願いごと一つ二つとなくなりて加齢というは引算のごと

教育長賞　沼津市　土屋八代枝

走り来てひらいて見せる孫の掌にどんぐり二つ温もりてあり

坂井先生は牧水賞上位の作品について、意外性のある現代感覚のうた、白秋のような詩情、茂吉的な古語の取り入れも効果があり、良い歌になったと選評を結ばれた。

毎年開催される短歌大会は多くの方々の協力を仰いでつづけることができる。青木朝子本会理事は五十六回すべてに出席されておられるとのこと。著名な歌人の講話を聴く機会に恵まれて、私たちは短歌を作るよろこびを感じ取っていく。参加するすべての人が楽しめる「沼津牧水祭・短歌大会」をこれからも期待してやまない。（本会会員　高木絢子）

第56回沼津牧水祭
碑前祭・芝酒盛
十月十八日（日）午前十一時

前日の予報で当日の天候が心配されたが、雨も上がり、気持ちの良い晴天に恵まれ、第五十六回「沼津牧水祭碑前祭」が開催された。

琴名流大正琴沼津支部石井会による大正琴の演奏につづき、林茂樹理事長の挨拶、栗原裕康市長、工藤達朗教育長の祝辞があり、榎本篁子館長の歌碑への献酒・献花と挨拶が行われた。

今回で三回目の青木畝堂氏による「浜辺の歌」などの親しい曲と普化宗本曲「打破」の尺八の演奏に聞き入った。つづいて、今回も花柳寿宗師による牧水短歌と長詩「枯野の旅」の日本舞踊が披露され、青空の下でしめやかに舞う姿は、ますます円熟味が増して来られた。

第二十回「中学生短歌コンクール」の特選歌の表彰が行われた。二十回目の節目にあたる今回は、市内の全十九校から応募があり、その中から選ばれた十首の特選歌が披露されると、会場からは大きな拍手が起った。式典の最後に、「牧水のうた」を歌う会の混声合唱の素晴らしい歌声が澄んだ空気の中に流れた。

正午に式典が終わり、「芝酒盛」へ移った。

栗原市長、山崎篤市議会議長、牧水生誕地宮崎県日向市東郷町若山牧水顕彰会の小野三千樹、黒木茂範両理事、東京牧水会の和田昱二会長と榎本館長の六人による鏡割りにつづき、山崎議長の音頭による乾杯で「芝酒盛」が始まり、香り高い清酒「牧水」が酌み交わされた。

岳心流沼津愛吟国風会が歌碑前で牧水短歌を吟じ、つづいて、初参加のぬまづ観光ボランティアガイドと沼津ハーモニカクラブによる合唱と演奏。そして、裾野五竜太鼓と「ようそろ」の太鼓の演奏がつづいた。力強い太鼓の演奏は、「芝酒盛」の定番となっている。

恒例となった裏千家宗菊会による野点席で、秋の風を感じながらいただく抹茶に、賑やかな中にも落ち着いたひとときを見出すことができた。碑前祭・芝酒盛は盛会のうちに、午後二時終了した。

なお、牧水の長男旅人氏の四人のお子様方（牧水の孫にあたる）が、初めてそろって参加していただき、会場で紹介されたのも大変よろこばしかった。

ぬまづ観光ボランティアガイドと沼津ハーモニカクラブによる合唱と演奏

第22回 雛の歌会

三月七日(日)
午後一時三十分
沼津市若山牧水記念館会議室

講師の日高堯子先生

雛の歌会というには少々ふさわしくない冷たい風雨の日、日高堯子先生（第十三回若山牧水賞受賞者）を講師に迎えて催された。

日高先生は、豪快ながらも繊細な語り口で一首一首を丁寧に批評された。短歌と散文について、短歌は心情の凝縮されたものの表現であり、自分をどれだけ凝縮できるかで歌の良し悪しが決まる云々は、心に残った。

今回は、東部歌会と日程が重なったため、例年より少ない七三名の投稿で、聴講者五名を含む四四名が出席したが、厳しい中にも笑いのある楽しい会だった。終了後、講師を囲んでの懇親会では、講師の人となりがうかがわれ、作歌の話など勉強になり有意義だった。

日高堯子先生選の十首

黄の彩を蝶より濃ゆく点しゐて冬ざれの庭に石蕗凛と立つ　杉本　弘子

上句の表現が良く、情景をよくまとめていて、上手い歌である。

藪椿ひとつ落ちたり足下にほのぼのとまだ新しき花　芹澤　君代

このままで十分まとまった良い歌である。花は色で表してもよいのでは。

わが捻り作りし小さな土雛をそっと手に乗せ無き娘をおもう　松本　正子

ほのぼのとした歌で好感が持てる。無きは亡きか、読者の想像に待つか。

帰りがけいつも目の合ふ気もちして接骨院の骸骨に笑む　佐藤なほ子

面白味のある歌で、特にいうことはないが、気持ちが少し弱いか。

吹きだまりの落葉を分けて水仙がぐいつぐいつと芽を伸ばしゐる　前田　鐵江

観察眼のすぐれた力強さを感じる良い歌だと思う。

ひと日ひと日もの言う如く伸びている梅の徒長枝に耳澄ましいぬ　向笠　律子

上句の伸びのある言葉遣いが面白い。苦労して作った歌だと思う。

仏壇のうっすら埃浮き立たせ大寒の陽は部屋に射し来る　岸本　園子

情景そのままに斜光の感じが良く出ている。埃がリアルで面白い。

よび掛けにか細き指をそっと出し白寿の母は吾の手探す　山田　攻

作者の優しさが出たリアルな表現にひかれる歌である。

稜線の向こうの空の明るみてほがらほがらに月の昇り来　稲葉　歌子

単純な内容の方が歌としてスッキリする。ほがらほがらの言葉の魅力か。

汚れ物すすぐ霜夜の背戸にさす月の明りに小さき吾が影　勝又　文江

介護を歌うのは暗くなりがちだが、なるべく明るく歌い上げたい。リズムが良く下句に心ひかれる。

（本会会員　原　悦子）

文　化　講　座

講　演「牧水短歌の問題点～解釈・観賞をめぐって～」

日時　平成21年11月28日（土）午後２時～４時
講師　藤岡武雄氏　「あるご」主宰、前日本大学教授

講　演「太宰文学のおかしさ～不器用に生きた天成の語り部～」

日時　平成21年12月19日（土）午後２時～３時30分
講師　池内　紀氏　ドイツ文学者、エッセイスト

講　演「三鷹に生きた太宰治～取材こぼれ話～」

日時　平成22年１月23日（土）午後２時～４時
講師　佐藤清孝氏　朝日新聞社記者（武蔵野支局勤務）

牧水記念館短歌会、短歌講座

◇牧水記念館「短歌会」
(10月を除く毎月第２土曜日午後1時30分～3時30分)
◇初心者のための「短歌講座」
(10月を除く毎月第２土曜日午前10時～12時)

短歌の愛好者を対象として、平成７年度に開講した初心者のための「短歌教室」は、翌年度から「牧水記念館短歌会」として継続して開講されています。

須永秀生本会副理事長が講師をつとめており、牧水の短歌から現代歌人の作品までを扱うとともに、万葉集から古今集、新古今集、江戸時代の和歌について、講師の手作りの資料をもとにした講話も好評です。

平成11年度からは、短歌に親しむ人々の拡大を図ることを目的に、新たに「初心者のための短歌講座」を開設しました。受講者が提出する１～２首の短歌作品を講師がていねいに批評、添削指導しており、受講者から大変よろこばれています。

「初心者のための短歌講座」を受講した後、「牧水記念館短歌会」に入会して、さらに作歌の向上に励んでいる受講者もおられます。

「短歌会」

「短歌講座」

牧水記念館俳句会

平成19年度に沼津市と沼津市教育委員会の主催により開催された第３回沼津文学祭「俳句ＤＥ沼津―沼津発見五七五」の助言者をつとめられた俳人の榎本好宏先生を講師にお迎えして、翌平成20年度から「牧水記念館俳句会」を隔月で開催しています。榎本先生は、現在、読売新聞地方俳壇の選者をされておられます。

受講者は、毎回の提出期限までに未発表の自作３句を提出し、先生からご指導を受けます。投句された一句一句について、丁寧に批評をしながら語られる榎本先生の蘊蓄（うんちく）の深さに受講生は感心させられるばかりで、大変好評を博しています。

「牧水記念館俳句会」は、平成20年度は５回開催で受講者延べ129人、平成21年度は６回開催で受講者延べ164人、毎回23人～29人が受講しています。

なお、榎本好宏先生は本年２月に栄えある第49回「俳人協会賞」を受賞されました。「牧水記念館俳句会」の受講者一同で受賞のお祝いを申し上げました。

先生のお話に笑い声の出る教室

榎本先生の第 49 回俳人協会賞受賞をお祝いして

牧水記念館書道講座

歌を詠む会員のなかから、自作の短歌や俳句の作品を筆で書きたいので、書の指導を受けられるようにしてほしいという要望があったことから、平成16年度から牧水記念館書道教室が始まりました。

講師に、市内在住の書家で「研心会」主宰の成田真洞先生をお迎えし、年10回の教室が開かれ、毎回12～19人が受講しています。平成21年度は、８、12月を除く毎月第３水曜日の午後１時～３時に開講され、延べ107人が受講しました。

毎年度末に、受講者の作品を牧水記念館ラウンジに展示して来館者に観賞していただいていますが、すばらしい作品がそろい評判を呼んでいます。今回は、平成22年３月17日(水)～3月28日(日)の間に開催され、延べ459人が観賞されました。

成田先生から指導を受ける受講者

出展作品の講評をする成田先生

出展作品の前で　成田先生と受講者

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

空に舞う風の音　パンフルート・トリオ

日　　時：平成21年５月16日(土)　午後6時30分
出　　演：クリスチャン・チュカ(ヴァイオリン)
　　コーネル・パナ(パンフルート)
　　ジノ・モンティル(ピアノ)
来 場 者：36人

牧水の自然空間に遊ぶ ― 戯れの音ども

日　　時：平成21年５月23日(土)　午後6時30分
出　　演：石和美和(リコーダー、フルート)
　　杉山佳代(ピアノ伴奏)、鈴木江美(ピアノ)
　　小林陽子(ヴォーカル)、望月房子(ピアノ伴奏)
来 場 者：109人

髙田紹代　“歌の贈りもの”

日　　時：平成21年６月６日(土)　午後6時30分
出　　演：髙田紹代(ソプラノ)
　　伊藤康英(ピアノ)
来 場 者：136人

古楽コンサートシリーズ24
『フラウト・トラヴェルソとチェンバロの夕べ』

日　　時：平成22年３月27日(土)　午後6時45分
出　　演：前田りり子(フラウト・トラヴェルソ)
　　杉山佳代（チェンバロ）
来 場 者：128人

牧水記念館で余生を送る
「千本太郎」

沼津市は、千本浜公園の松を大切に守り育てていくため、昭和四十八年、太い松や特徴のある松など十七本を選んで愛称を募集しました。「常盤の松」「鶴舞の松」「天女の松」などのゆかしい風情のある名称とともに、一番大きくて立派な松に「千本太郎」という愛称が付けられました。

それから三十六年が過ぎ、枯れてしまったり、強風で倒れた松もありました。

「千本太郎」は、高さ約二十五メートル、根元付近の幹周り約四メートルもある樹齢約四百年の立派な松で、市民から親しまれて来ましたが、松くい虫に侵食されたため、昨年四月二十三日に伐られました。

公園内の「千本太郎」の切株

これを惜しんだ自然保護団体などの市民の方々が市の緑地公園課に「千本太郎」を生かしたモニュメントを制作して、市民の皆さんの目にふれる場所に設置するようにと要望しました。市ではこの要望に応え、「千本太郎」を輪切りにして、年輪が読み取れるようにした衝立を制作することになりました。

設置場所については、大正十四年、県の計画した松原伐採に反対した牧水や市民の運動が力となり、松の伐採が中止された経緯から、千本松原の一角にある当記念館に設置することがふさわしいということになりました。

記念館内に置かれた衝立

本年三月、出来上がった衝立が当記念館に運びこまれました。衝立は、元の木の高さ約六メートル付近を輪切りにしたもので、腐食した部分を削り取ったためにやや細くなってはいますが、断面の直径は約一メートル、幹周りは約三・二メートルもある立派なもので、正面玄関に設置されました。

衝立と共に制作されたベンチが正面玄関入り口左側に置かれましたが、来館者からゆったりした気分で庭を眺められると好評です。

ゆったりとくつろげる松材のベンチ

平成21年度事業報告

総　　会（第23回総会）平成21年5月8日(金)　午後6時～7時
理 事 会　第１回（通算119回）平成21年4月12日(日)　午後6時～7時35分
　　第２回（通算120回）平成21年5月 8日(金)　午後5時30分～5時40分
　　第３回（通算121回）平成21年8月11日(火)　午後6時～6時55分
　　第４回（通算122回）平成21年12月2日(水)　午後6時～7時
　　第５回（通算123回）平成22年3月 4日(木)　午後6時～7時

会報発行　第22号発行　平成21年5月15日
館報発行　第43号発行　平成21年9月10日
　　第44号発行　平成22年3月15日

1　調査研究事業

(1) 第10回「百草園牧水歌碑祭」（東京牧水会主催）
　日　　時：平成21年8月23日(日) 正午
　会　　場：東京都日野市百草園　牧水歌碑前
　参 加 者：金子安夫、磯崎剛、勝又十枝、野村章、原悦子、三宅芳則

(2) 第59回牧水祭（宮崎県日向市主催）
　日　　時：平成21年9月17日(木) 午前10時
　会　　場：日向市東郷町坪谷若山牧水生家裏牧水歌碑前及び牧水公園ふるさとの家
　祝電打電

(3)「牧水まつり」（牧水詩碑保存会主催）
　日　　時：平成21年10月20日(火) 午前11時
　場　　所：群馬県吾妻郡中之条町　暮坂峠
　祝電打電

2　第56回沼津牧水祭の運営

(1) 短歌大会
　日　　時：平成21年10月4日(日)
　　午前10時30分～午後4時20分
　会　　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
　講　　師：坂井修一氏（第11回若山牧水賞受賞者、「かりん」編集委員）
　応募短歌：164首
　参 加 者：107人

(2) 碑前祭・芝酒盛
　日　　時：平成21年10月18日(日)
　　午前11時～午後2時30分
　会　　場：千本浜公園　牧水歌碑前
　参 加 者：468人

3　文学講演会及び文学講座等の開催

(1) 文化講座「牧水短歌の問題点～解釈・鑑賞をめぐって～」
　日　　時：平成21年11月28日(土)午後2時～4時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：藤岡武雄氏
　参 加 者：55人

(2) 文化講座「太宰文学のおかしさ～不器用に生きた天成の語り部」
　日　　時：平成21年12月19日(土)午後2時～3時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：池内　紀氏
　参 加 者：56人

(3) 文化講座「三鷹に生きた太宰治～取材こぼれ話」
　日　　時：平成22年1月23日(土)午後2時～4時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：佐藤清孝氏
　参 加 者：43人

(4) 第22回「雛の歌会」
　日　　時：平成22年3月7日(日) 午後1時30分～4時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：日高堯子氏（第13回若山牧水賞受賞者）
　応募短歌：73首
　参 加 者：45人

(5) 初心者のための短歌講座
　日　　時：平成21年4月～平成22年3月毎月第２土曜日
　　午前10時～12時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：須永秀生氏
　参 加 者：11回開催延べ194人

(6) 牧水記念館短歌会
　日　　時：平成21年4月～平成22年3月毎月第２土曜日
　　午後1時30分～3時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：須永秀生氏
　参 加 者：11回開催延べ143人

(7) 牧水記念館俳句会
　日　　時：平成21年4月～平成22年3月
　　隔月第４日曜日午後2時～4時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：榎本好宏氏
　参 加 者：6回開催延べ157人

(8) 書道講座
　日　　時：平成21年4月～平成22年3月毎月第３水曜日
　　午後1時～3時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：成田真洞氏
　参 加 者：10回開催延べ107人

(9) 第20回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
　募集期間：平成21年5月21日(木)～9月10日(木)
　応募短歌：1,777首（19校1,777人）
　入選短歌：53首
　選　　者：青木朝子、須永秀生、杉山芳脊、曽根耕一、星谷亜紀
　表　　彰：平成21年10月18日(日)
　　沼津牧水祭碑前祭にて

4　特別企画展

「歌人牧水の遺墨、遺品、書籍を中心とした特別企画展」
　期　　日：平成21年11月17日(火)～12月20日(日)
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ及び展示室
　入 場 者：1,258人

5　企画展示

(1)「中学生短歌コンクール」入賞歌作品展示
　(成田真洞氏揮毫による特選歌10首、入選歌43首の短冊)
　期　　日：平成21年10月18日(日) ～11月1日(日)
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　入 場 者：576人

(2) 平成21年度書道講座受講者作品展示
　期　　日：平成22年3月17日(水)～3月28日(日)
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　入 場 者：459人

6　音楽イベント

第１回　「空に舞う風の音　パンフルート・トリオ」
　日　　時：平成21年5月16日(土) 午後6時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：クリスチャン・チュカ（ヴァイオリン）、コーネル・パナ（パンフルート）、ジノ・モンティル（ピアノ）
　来 場 者：36人

第２回　「牧水の自然空間に遊ぶ―戯れの音ども」
　日　　時：平成21年5月23日(土) 午後6時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：石和美和（リコーダー、フルート）、杉山佳代(ピアノ伴奏)、鈴木江美(ピアノ独奏)、小林陽子(ヴォーカル)、望月房子(ピアノ伴奏)
　来 場 者：109人

第３回　「高田紹代“歌の贈りもの”」
　日　　時：平成21年6月6日(土) 午後6時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：高田紹代(ソプラノ)、伊藤康英(ピアノ)
　来 場 者：136人

第４回　古楽コンサートシリーズ24
　「フラウト・トラヴェルソとチェンバロの夕べ」
　日　　時：平成22年3月27日(土) 午後6時45分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：前田りり子（フラウト・トラヴェルソ）、杉山佳代（チェンバロ）
　来 場 者：128人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条　この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会および碑前祭）の運営
(3) 文学講演会および文学講座の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は法人
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条　会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

2　この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　年額　五、〇〇〇円
(2) 賛助会員　年額　一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　須永　英男
〈理事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　金子　安夫　四方　一弥
八十濱俊一　杉山　芳春　長澤　靖夫　青木　朝子　星谷　昭子
〈監事〉杉山　重義　鈴木　弘行
〈事務局長〉大澤　敏夫
〈事務局〉大島　葉子　伊藤早智子　羽根田治子　近藤美智代

編集後記

日向市若山牧水記念文学館館長で、若山牧水賞選考委員の伊藤一彦先生から「牧水評価小史―生誕百二十五年の牧水」と題する玉稿をお寄せいただきました。先生は、本年が明治十八年（一八八五）生れの牧水の生誕百二十五年にあたることから、牧水の評価を検証し、牧水評価の新たな出発の年とするため、案外読まれていない牧水の歌を虚心に一首一首読むことから始めたいと結んでおられます。

平成二十一年度の大きな事業として、牧水の顕彰を目的に、本会が収集し、あるいは寄贈していただいた資料及び寄託された貴重な資料を展示する「特別企画展」を開催し、好評でした。ご協力くださった皆さま方に厚く感謝申し上げます。

「特別企画展」の記念講演を牧水研究家でもある歌人藤岡武雄先生にお願いしました。また、太宰治をテーマとして開催された第四回「沼津文学祭」に協賛し、池内紀先生及び朝日新聞の佐藤清孝記者を講師にお招きして文化講演会を開催いたしました。

「沼津牧水祭・短歌大会」と「雛の歌会」には、若山牧水賞を受賞された坂井修一先生及び日高堯子先生をそれぞれ講師にお迎えし、充実した歌会とすることができました。

牧水生誕百二十五年を迎え、牧水の顕彰が、より活発に発展していくことを期待しております。

■会報「幾山河」第23号　■平成22年5月15日発行　■編集・発行　社団法人　沼津牧水会　■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷　㈱耕文社